

新
ナガサキ
移住のカタチ
自分らしい生き方

太田祐子さん

移住歴12年

京都の美術系の大学、佐賀の有田窯業大学校で陶芸を学んだ太田祐子さんが、波佐見焼の産地である波佐見町に移住したのは約12年前。同じく関西出身の女性と二人で「松原工房」を立ち上げ、約10年間、意欲的に日用食器の創作に取り組んだ。作品は若い女性を中心に人気を博したが、一年半前、それぞれの道を歩もうと解散。太田さんは独立し、昨年新たに「アトリエ ビスク」をオープンした。緑に囲まれた小高い場所にある工房には自身の作品を並べたギャラリースhowケースも併設し、柔らかな雰囲気が漂っている。

太田さんはこの気持ちの良い空間で、毎日ろくろを回している。その技術は卓越しており、波佐見焼では女性初となる、「ろくろ（成形）」の伝統工芸士に認定されている。確かな技術から生み出される作品は、繊細で優美。ろくろならではの美しいラインが印象的だ。

太田さんは自身の作品を作る一方で、生地屋という一面も持っている。波佐見焼は、陶土屋、釉薬屋、型屋、生地屋、窯元、上絵屋のそれぞれに作業を発注する分業体制をとる。生地屋の仕事とは、素焼き前の生地を作り、窯元や作家に卸すこと。同じ形のをいくつも作る必要があるため、高い技術が求められる。「同じ図面でも、作る人が違えば、焼き上がりは異なります。注文されたものに自分が考えた要素を入れ、より良い物を作る。生地屋はクリエイティブな仕事だと思っています」と太田さん。波佐見町では生地屋の後継者不足が深刻で、太田さんはこの仕事に就く若い人々を増やすためにも、居心地の良い空間で仕事ができることを示すのは大切だと考えている。

「今があるのは10年間、松原工房でひたすら作品を作り続けた時間があったから」。太田さんは、そう前置きし「がんばっている姿を見てくれた人がいたから、この場所も地元の方に紹介していただけたのだと思っています。波佐見の人はフレンドリーでオープンな人が多いですね。同業者の方に技術面を尋ねることがあるのですが、ライバルであるにもかかわらず、丁寧に教えてくださいます。本当にありがたいですね」と言う。

「好きなことを追い求めていたら、道が開けた」と話す太田さん。「ろくろは生涯現役で！」と笑う彼女は、今、焼きものの町に欠かせない存在となっている。

焼きものの町で
伝統を受け継ぎながら
私らしく生きる。



心地よい風が吹く、緑豊かな場所に建つアトリエ ビスク。「時間がゆっくり流れているせいか、みなさん、滞在時間は長いですね」と太田さん。ゴブレットとワインカップは太田さんの作品。

伝統工芸士 / アトリエ ビスク